

吉田城さんのこと

田 口 紀 子 Noriko TAGUCHI

私が初めて吉田さんのお名前を耳にしたのは、東大から京大の大学院に進んだ修士の1年の時だった。吉田さんは京大の学部から東大の大学院に進学されていて、京大学部時代に同級生だった人たちが私の大学院の先輩として何人もいらっしやり、折に触れて吉田城という奇抜なファッションの大秀才がいた、という話を聞いていた。また、吉田典子さん（旧姓生駒さん）が大学院の同級生で、吉田城さんが生駒さんの「彼氏」だと聞いたことも、吉田さんの印象を強くした一因かもしれない。生駒さんは修士1年の秋からサンケイスカラシップで、すでに吉田さんがフランス政府給費留学生として留学していたパリに発たれ、吉田さんの神話的小説エピソードは語り続けられてはいたけれども、遠い存在のままだった。

その吉田城さんに初めてお目にかかったのは、他でもない吉田さんと生駒さんの結婚式の披露宴でのことだった。吉田さんは3年あまりの留学で当時最先端のブルーストの草稿研究についての博士論文を仕上げられ、大阪大学の旧教養部に着任されてまもなくの頃だったと思う。生駒さんは大学院に復学され、学年は違ってしまったけれども、結婚式に友人として呼んで下さったのだった。

東京神田の学士会館でおこなわれた披露宴には、東京大学の先生方をはじめ、学会の主だった方々が席を連ね、吉田さんの秀才ぶりを披露されていたけれども、私の第一印象は、どちらかというとひょうきんな感じの人だということだった。フランス文学の秀才というと、髪を長くのばしたロマンチック・ヒーローのような憂鬱なタイプを思い描いていたのだが、私が目にしたのはパンチパーマをかけ（これは現在のコノテーションとは違い、当時とてもおしゃれなヘア・スタイルだったのだ）、いかにも軽そうな感じの明るい青年だった。

何となく納得できずに家に帰って来たのだが、それからしばらくして、院の同級生だった田村真理さん（旧姓下堂園さん）と二人で、お二人の新居にお食事に呼んでいただいた。大阪地下鉄御堂筋線の桃山台駅から歩いて10分ほどのところにあった、川沿いに建つおしゃれなマンションで、我々は吉田さんの手になるフレンチのフルコースをごちそうになった。深紅のバラのイラストが入った小さなカードに、その日のメニューがフランス語でタイプしてあったのを思い出す。お料理は全部は覚えていないが、お手製のテリーヌが出たのには驚

いた。テリーヌが家庭で作れるとは知らなかった。そう言うと、吉田さんは料理の本を見せてくれて、作り方のこつまで詳しく指南して下さいました。

いつもの通りにこやかな典子さんのとなりで、吉田さんは豊富な話題と気遣いと、おいしいお料理で、我々を楽しませて下さったので、ずいぶん長居した記憶がある。パリの古本屋で見つけたという、ぼろぼろの19世紀ラルースを「僕の宝物」と大事そうに見せて下さったことを除けば、結婚式での私の印象はますます補強された。彼がどんなに学問的に比類ない仕事をする人かという事を知るのは、それから8年後、私が助手として京大文学部の仏文研究室に勤めることになり、助教教授だった吉田さんのすぐそばで働くようになってからのことだ。

私が仏文研究室で助手になったのは1987年の10月のことだから、それから18年近く、彼の仕事ぶりをごく近くから見ていることになる。と言っても、吉田さんの専門のお仕事については、それが実際どんなにすぐれたものであるかということに関しては、門外漢である私がご紹介できるようなことではない。ただ、折に触れて（それも頻繁に）いただく論文の別刷りや、翻訳、編著書から、その精力的なお仕事ぶりに驚嘆し続けていた、と言うのが正直な感想である。

私が仏文研究室に勤めるようになったときには、吉田さんはすでに人工透析を始められていた。週に3日、午後の5時間ほどを拘束され、また透析のあとはしばらく血圧が下がって仕事ができないとうかがっていたので、そんな状況の中で、どうしてあれほどの仕事ができるのか、近くで見えてもわからないほどだった。

しかも、吉田さんは私の知人中でも、無類の「お茶」好きであった。お茶を飲むのが好きというのではなく（いや、好きだったのかもしれないが）、喫茶店で人と話すのが大好きだった。暇があれば（おそらく本当はなかったのだろうが）研究室を訪れる人たちや学生達と「お茶」をして、長い時間楽しそうに歓談していた。

人工透析をせざるを得ないほど体を酷使してまでも仕事をする事と、少なくともいい長話で時間をつぶすことが、吉田さんの中でどう折り合っていたのか、今でもよくわからない。

吉田さんの仕事は、ご自身の研究だけにとどまらず、科研費の研究班の組織、頻繁に来るフランスからの講演者の受け入れ、学生の論文指導、いずれも精神的に手を抜くことなくこなされていた。横から見えて、断ればいいのになと思う依頼でも、「断れない性格だから」と言いながら丁寧に応じていらしかった。それを見ていると、彼が病をかかえていることをつい忘れてしまっていた。

しかし今振り返ると、この3、4年ほどは体の不調を漏らされることが多くなっていた。透析を長期間続けることで起こる不調には対処療法しかなく、一時的に良くなるにしても根本的な治癒は望めない。この時期に科研のテーマとして「病」「身体」を選ばれたのは、ブルーストが病身だったことだけが原因ではないだろう。

これは、自らの病を研究対象として客観的に見ようという意図だったのだろうか。そう思っていたところ、吉田さんが亡くなって、ある人から聞いたエピソードに、はっとさせられることがあった。

ブルーストの草稿は、その悪筆で有名である。「よくあんな読みにくいものを研究対象にして何時間も読めますね」とその人が吉田さんに聞いたところ「受苦だよ」と答えられたというのである。吉田さんは、あの一見軽い明るさの裏で、人生を「受苦」と考えていたのかもしれない。ご自分の病も自分の人生の切り離せない一部として積極的に受け入れようとしていたのかもしれない。そうでなければ、病をおしてあれだけの仕事をする勇氣は持てるものではない。吉田さんの「悲しみ」は今となっては想像するしかないが。

でも吉田さんは確かに彼の人生からいくつもの「よろこび」を受け取っていただろう。彼の結婚式での晴れやかな面もち。そして長女の梨奈ちゃんが生まれた時。私はその翌日に、京大病院の病室に吉田さんに連れられて、梨奈ちゃんに会いに行った。典子さんの腕に抱かれた梨奈ちゃんのまだ粉を吹いたような頬を、人差し指で押した吉田さんの仕草を、私はまだよく覚えている。そして学生の仕事が評価されたときの、彼のうれしそうな顔。

我々は、それぞれ自分の身の丈に応じて、吉田さんからいろいろなことを学んだ。その記憶は時と共に薄れていくように見えながら、研究室のざわめきや、みんなで飲む紅茶の香りの中に、ふとよみがえるだろう。

さいごに吉田さんに心からの感謝を捧げ、そのご冥福をお祈りしたい。

(たぐち・のりこ 京都大学大学院文学研究科教授)